

Report on educational activities for nurturing students' knowledge and skills related to disaster prevention and management

河村 洋子

文化政策学部 文化政策学科

KAWAMURA Yoko

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

防災・減災の分野における本学の地域連携活動強化の必要性と、学生の防災・減災の準備の促進の重要度が増しているという上述の状況から、地域の近隣小中学校で学生たちが自ら防災・減災教育を展開することで、自らの防災・減災に必要な知識やスキルを身につけていくという地域連携実践演習の科目として「防災・減災力向上講座」を立ち上げた。本稿では、2018年及び2019年度の前期・後期に展開した当該科目（以下、科目という）の取り組みの様子を報告し、今後の課題と展望について考察することを目的とする。

Considering the increase in needs of building the basic knowledge and skills related to disaster prevention and management among students and for enhancing the collaborative relationships in in the neighbor communities, we have developed and provided the community collaboration practicum course at Shizuoka University of Art and Culture. This paper aims to briefly summarize the educational activities of the course, to discuss success and challenges and to finally to propose the future directions.

1. はじめに

南海トラフ地震と東海沖地震による大規模な被災が予想される静岡県において、防災・減災は重要な課題である。また、2019年にも国内全域で大型台風の連続的な襲来によって各地が被災した。自然災害による被災規模は私たちが予想できる範囲を超える状態が続いており、災害発生時にいかに柔軟に対応ができるかがますます重要になっている。

個々人が自らの命をしっかりと守ることができること（自助）、家族や周辺のコミュニティの人々とともに助け合い、互いに命を守りあうこと（共助）、そして地方公共団体・自治体（以下、自治体という）などの公的な立場による基本的には制度的な支援が命を守ること（公助）、の3つの柱が防災・減災の基盤を支える。公助は一般に自治体による支援であり広域を対象とするが、「命を守る」という点では、むしろ小さな集団のコミュニティや家族などが重要である。自然災害の被災において、洪水などの水害はタイミングを予想することが可能であるが、地震はいつ起こるかを正確に言い当てることはできない。このような観点から、自宅のある地域コミュニティに限らず、自らの生活圏で想定される学校や職場などのコミュニティでの共助体制の構築も重要である。

本学は、地域に根ざした大学として市内の多様なコミュニティとの協働活動を展開している。防災・減災という分野では、避難場所として指定されている隣接する浜松市立東小学校のグラウンドを利用して防災訓練を行っているが、共同実施のような形はとっておらず、より深い連携活動展開の可能性が十分にある状況である。

また、本学学生の出身地を見てみると、近年県外生も増えている。静岡県全域の高等学校までの防災・減災教育の展開の様子を学生から教えてもらった際に、県外から転入した私はその充実度に驚いた。例えば、中学校まで地域の防災訓練への参加は学校から半ば強制的に課せられるもの

であり、高等学校進学の際の内申点に加味される。このような取り組みは、前任地の熊本県や出身地である山口県での経験とは大きく異なる。静岡県の備えに対する危機感や温度感の高さを改めて実感した。県外出身の学生が増えるということは、備えができていない、あるいは相対的に準備度や防災・減災意識が低いながら、一人暮らししている学生が増えているということである。

2. 目的

防災・減災の分野における本学の地域連携活動強化の必要性と、学生の防災・減災の準備の促進の重要度が増しているという上述の状況を踏まえて、地域の近隣小中学校で学生たちが自ら防災・減災教育を展開することで、自身の防災・減災に必要な知識やスキルを身につけていくという地域連携実践演習の科目として「防災・減災力向上講座」を立ち上げた。

本稿は、2018年及び2019年度の前期・後期に展開した当該科目（以下、科目という）の取り組みの様子を報告し、今後の課題と展望について考察することを目的とする。

3. 科目の活動内容

本章では、科目の活動内容を記述する。主となるのは、実施した防災・減災教育であり、具体的には前期には浜松市立東小中学校、後期は市立八幡中学校において両年度に学生が先生役となって実施した防災教育活動の内容を、準備の段階を含めて概説する。また、科目の中で得た被災地支援のボランティア活動への参加と地元企業による被災地支援組織との連携を紹介する。最初に、これらの活動の基盤となり科目構築に先立つ背景となる、学生の防災・減災活動について簡単に紹介する。

1) 学生による防災・減災活動：非公認サークル「さいのこ」（以下、「さいのこ」という）

本学学生数名により2013年度に立ち上げられた「さいのこ」は、本学の学生が、防災をより身近なものとして感じることができるようにする取り組みを展開してきた。非公認でありながら、事務局財務室の防災担当者と連携し、賞味期限の短い備蓄食品を利用した炊き出しや、碧風祭（大学祭）での子ども向けのアクティビティの提供などを継続していた。2017年度に代表が代わり、活動の方向性を地域コミュニティとの連携による防災・減災教育活動へと転換していった。その後、かねてから協議していた東小学校との防災・減災分野での連携活動の実現を目指して活動する中で、より多くの学生の参加が必要であるという課題が出てきた。著者は自らの熊本地震の経験を踏まえ、2017年から「さいのこ」との活動を始めた経緯から、学生が地域との実践的な連携活動に参加して、一定時間の活動に取り組むことで単位を取得できる地域連携実践演習の一科目を立ちあげることとした。科目の内容に関して、「さいのこ」のメンバーと相談し活動と連携させるかたちで構成している。

2) 地域連携実践演習科目「防災・減災力向上講座」

(1)科目概要

本科目は、本学の学生たちが防災・減災教育の担い手になることで、自らの防災・減災に関する知識とスキル（実践的な力）を身につけることを学修目的とする。「教える」立場になることが、自ら学ぶ必要性を生む。したがって、科目には、実際の防災教育の企画や準備の他に、防災・減災に関する基礎的な知識や実践的な力を身につけるために、以下のような活動が含まれる。

- ・基礎的な知識を身につけるための講義・座学（NPO法人代表によるもの、浜松市による防災教育、2年目は防災士の資格を取得した学生リーダーによって講義）
- ・救急救命講習（基礎編）の受講
- ・避難所運営ゲーム（HUG）の実施
- ・浜松市防災学習センター（はま防～家）の視察および施設内アトラクション体験
- ・防災・減災関連イベント支援活動（地域防災訓練の支援、



写真1：救急救命講習の様子

防災学習センターでのコンテンツの提供やイベントの支援など）

上記のうち、救急救命講習は中区消防署から講師を招いて開催するものであり、大学の教職員にも受講希望を募り共に受講した。（写真1）

他にも後述する被災地支援ボランティア活動への参加なども含まれるが、上記のものは科目の活動内容として継続的な実施が可能であると考えられる。

(2)参加学生

実際に科目履修登録をした学生および履修登録せずに参加した学生の人数を下表にまとめた。

表：参加学生の人数

		登録あり	登録なし
2018	前期 7名	文政1年2名、 2年1名 芸文3年1名 計4名	文政3年2名 芸文3年1名 計3名
	後期 18名	文政1年2名、 2年3名 国際1年2名 デザイン1年3名 10名	文政3年4名 芸文3年2名 国際4年2名 計8名
2019	前期 12名	文政3年2名、 2年1名 国際2年2名 デザイン1年2名 計7名	文政4年1名、 2年2名 芸文4年2名 計5名
	後期 20名	文政1年2名 国際2年3名 計5名	文政4年2名、 3年3名、2年4名、 1年3名 芸文4年2名 国際4年1名 計15名

後期の活動は八幡中学校で行う3学年の11クラスを対象に同時に実施するため、前期の東小学校と比較して必要な人数が増える。

(3)防災教育活動の内容

①浜松市立東小学校

東小学校の対象は6年生2クラスであり、一クラスずつ5または6限の45分間で防災教育を行った。活動の具体的な内容は、2018年度に教頭と6年生担任と協議しながら構成を企画した。（添付資料1として企画書を掲載）1学年を対象とするシンプルなものであり、内容は2018年度・2019年度の2年間同様であったので一括して紹介する。

開催日時は、いずれの年度も2学期初めごろの防災週間に合わせる形で実施した。2018年度は9月5日に開催を予定していたが、台風21号が襲来し小学校が休校となったため、13日に延期開催となった。2019年度は、年度当初の予定通り9月5日に開催した。

内容は自宅のDisaster Imagination Game (DIG)のようなものである。約10分程度の時間で、4人の生活班ごとに「防災えほん」の中の自宅のダイニングキッチンが

描かれたページを見ながら、危険な場所を探していった。児童たちは見つけやすいもの（固定されていない家具、レンジ横の燃えやすそうなカーテンなど）については、素早く発見し、さらに「熱いコーヒーがこぼれて、テーブル下の猫にかかりあっばれまわる」など想像力を働かせて探索的にグループワークを進めていった。あまり出てこない班もあるときに、担当する学生は（写真2）、児童が答えを見つげ出すようにうまく促しをしていく必要があった。



写真2：グループワークの様子

このような児童のグループワークののちに、各班から自分たちの発見を伝えあった。発見の中には、突拍子もないと感じられるものもあったが、各班を担当する学生はふざけているように感じられても否定はせず、常に想定外のことが起こり得ることを伝え、「そのようなことが起きたらどうするのか」ということを考える促しをするなどした。

各班からの発表が終了したら、全体で振り返りの時間を設け、確認を行った。この際に「防災えほん」から抜粋したページに記載してある答えを基に事前に準備しておいたスライドを投影しながら、発表された児童の新たな発見についても触れながらリーダー役の学生が講義形式で生徒たちに伝えた。

この家庭内DIGのようなグループワークののち、残りの時間では、身近にあるもので簡単に作れる防災グッズを実際に作ってみる時間を設けた。新聞紙で作るスリッパ（図1）とどのような紙でも作ることのできる紙食器（図2）である。

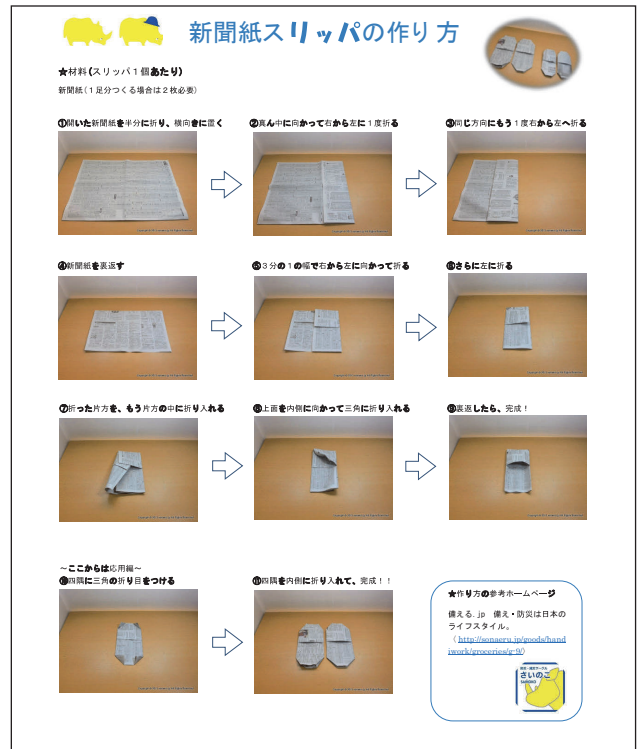


図1：新聞紙スリッパの作り方（出典：参加学生作成）

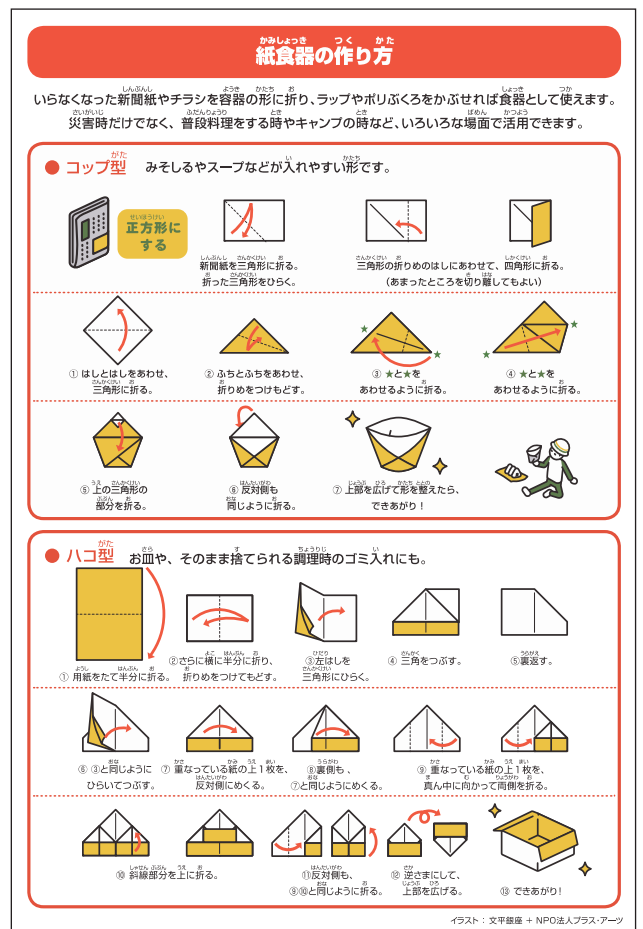


図2：紙食器の作り方（出典：イザ！カエルキャラバン！）



写真3：防災グッズ作成中の様子

最後に児童たちが自宅を同様に探索できるように、宿題を出し、担任に集めていただき受け取ったのちに学生たちがフィードバックして戻すようにした。(図3) これは、子どもを経由して自宅に取り組みの効果を波及させることを狙ったものであった。

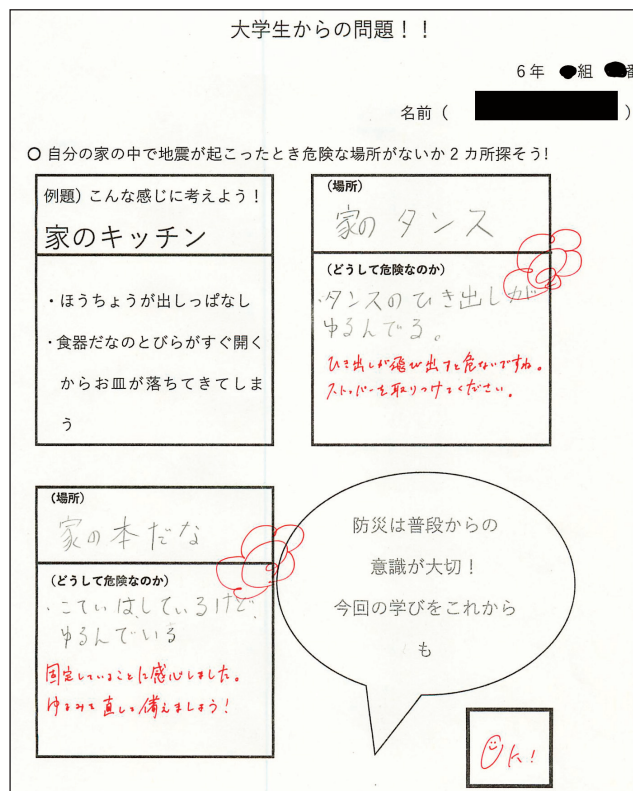


図3：児童からの宿題の例

②浜松市立八幡中学校

八幡中学校の活動内容も、防災教育担当教諭との打ち合わせを行い、ニーズを聞き取った上で構成した。2018年度の最初の取り組みの振り返りを基に、2年目は内容を変更した。また、2018年度に東小学校で行った防災教育の

内容は、八幡中学校の1年生の内容と重複する部分が多く、2019年度に同様にすると1年生は東小学校で取り組んだことを再度経験することになる点も変更の要因であった。したがって、2018年度と2019年度を分けて説明する。なお、八幡中学校では、生徒会の生徒約20名が、各クラスで進行する学生のサポート役として貢献してくれた。

<2018年度>

初年度は、2年生の生徒会メンバーからの提案で、2年生については校内DIGが確定していたため、学年の発達段階を考慮して、以下のような内容で企画を組んだ。

◎1年生 「身の回りの物を使って、様々な状況に対応しよう。」

学修目標

1. 身の回りの物を使って防災グッズを作ることができるようになる。
2. 状況ごとに身の回りの物を活用することができるようになる。
3. 工作を通じて、災害時の危険に対処できるようになる。
4. 防災を身近に感じ考えられるようになる。

活動の概要

- ①イントロダクションとして、クイズ形式で日用品が災害時に活用できるということについて、具体例を含めながら紹介する。
 - ②グループに分かれ、紙マスク、紙食器を実際に作ってもらう。
 - ③防災リュックの紹介、授業のまとめ
- ◎2年生 「校内の危険箇所を見て回ろう！」

学修目標

1. 校内の危険箇所が特定できる。
2. 改善方法を考えることができる。
3. 考え方を自宅など別の場所で応用できる。
4. 減災に関して自分でできることを考え実行できる。

活動の概要

グループに分かれて、校内の危険箇所を見てまわり、その後、危険箇所の改善方法をグループで検討する。

◎3年生 「避難所の暮らしについて考えてみよう！」

学修目標

1. 避難所運営についての知識が向上する。
2. 災害時要配慮者にどのような配慮が必要か考えられる。
3. 以上2つの目標の達成により、中学生が災害時どんなことができるのか考えられる。

活動の概要

- ①避難所に関する基本的な事柄を○×クイズで学んでもらう。
- ②避難所運営・災害時要配慮者の配慮に関する問を提示。(例)
 - ・女性・乳幼児・障がい者が避難されてきました。この方々にはどんな配慮が出来るでしょうか。(中学生がどんな行動が出来るのか、どんな配置ならよいのか、どんな部屋が必要か、などの観点から考えてもらう要配慮者に関する問)
 - ・避難所のトイレが汚いです。皆さんは何が出来るでしょうか(中学生が出来ることは何かがあるかを考えてもらう問)
- ③グループごとに議論をしてもらう。

④各問でグループから発表してもらう。
⇒必ず全グループが1度は発表するように配慮。

1年生3クラス、2年生4クラス、3年生4クラスを学生が2名または1名で担当し上記の内容を提供した。さらに、学生の合計22名の生徒会メンバーが各クラス2名または3名にわかれてサポート役を担当してくれた。

<2019年度>

前述のように、東小学校で防災教育を経験している1年生への配慮と、前年度の活動を振り返りを踏まえ、2年目の内容は以下のように改善・修正した。

◎1年生 「地震が起きた時、通学路に潜む危険について考えてみよう」

活動の概要

1. 通学路の危険な場所探し
 - 各自で事前に自分の通学路の危険箇所を探してもらう (事前宿題：図4)
 - 当日は通学路を考慮して、クラスを再編成。
 - クラス内でグループに分かれ、危険箇所の共有、危険な理由、解決策などについて話し合う。
 - 各グループから発表。
 - 最後にクラス担当学生が、発表内容を踏まえながら、準備したスライドを使用して振り返り。
2. 防災グッズのクイズ
 - 時間が余った場合に実施。

通学路の危険な場所探し

1年 組 番

名前()

④ ①

◎自分の通学路で**地震が起きた時**に危険だと思う場所を探してみましょう。

①通学路の簡単な地図を描いてください

北
 西 東
 南

②通学路の中で危険だと思った場所を1~3箇所つけ、○をつけてください
(①で描いた地図上に)
例) 川にかかった橋がある
崩れそうなブロックべいがある など...

裏面へ→

③危険だと思った場所の説明とその理由を書いてください。

例) (説明) ○○通りの歩道 (理由) ブロックべいがあり、 崩れて下敷きになる ことが考えられるから。	① (説明) (理由)
② (説明) (理由)	③ (説明) (理由)

④危険な場所の解決策をそれぞれ考えてみましょう。
(難しかったら空白のままで大丈夫です)

①

②

③

図4：事前課題（実際のサイズはA4に1枚ずつ：出典 担当学生作成）

◎2年生 「身の回りの物を使って、災害時の様々な状況に対処しよう」身の回りの物から学ぶ防災

活動の概要

- 身の回りにある物を使って、災害時における様々な状況における解決策を考えてもらう。
- 各班にカード（用意された物の名前を記載）を渡す。
例) 腕を怪我してしまった→ラップ、傘を使用して固定、保護をする。
例) ガラスが散らばっているため、足を保護したい→新聞紙、段ボールを用いてスリッパを作る。
- 各クラスに1セットずつ実物を用意し、設問ごと、実演発表をしてもらう。

◎3年生 「災害時、実際に起こり得る様々な状況を想定してみよう」シミュレーションクイズ

活動の概要

- 災害全般のクイズを出題し、対応等を考えてもらう。

例) 避難所のトイレが汚れている時、どうすればいい?
例) 家から避難する時、家の鍵やブレーカーはどうしておくべき?

- 各班で話し合い、いくつかの班から発表してもらう。

本来は1年生4クラス、2年生3クラス、3年生4クラスであるが、大学生の編成に合わせて各学年を3クラス（全体で9クラス）に分けて実施した。また、2年目も生徒会構成員22名が各クラス3または4名で大学生をサポートしてくれた。

<効果検証のための事前事後の調査票調査：2018年度>

2年とも学修目標に沿った効果があるかどうかを検証するために、学校の協力を得て全校生徒を対象にした自記式の調査票調査を実施した。防災教育実施の2週間程度前に実施前のものを、直後に実施後の回答に協力してもらった。

内容は事前事後ともリスク認識、家庭での地震の備えの状況、備えの必要性の認識、災害発生時の自助・共助の自己効力感及び役割認識である。また、事後のものには感想と内容の難易度などのフィードバックを含めた。(実際の調査票を添付資料2として掲載)

2019年度は集計が終了していないため、2018年度の簡単な結果を紹介する。ここでは詳述しないが、統計分析の検定結果も踏まえ、備えの役立ち感(図5)、共助の自己効力感(図7)は全学年で授業後に有意に向上した。また、学年によってばらつきが見られるが、自助の効力感

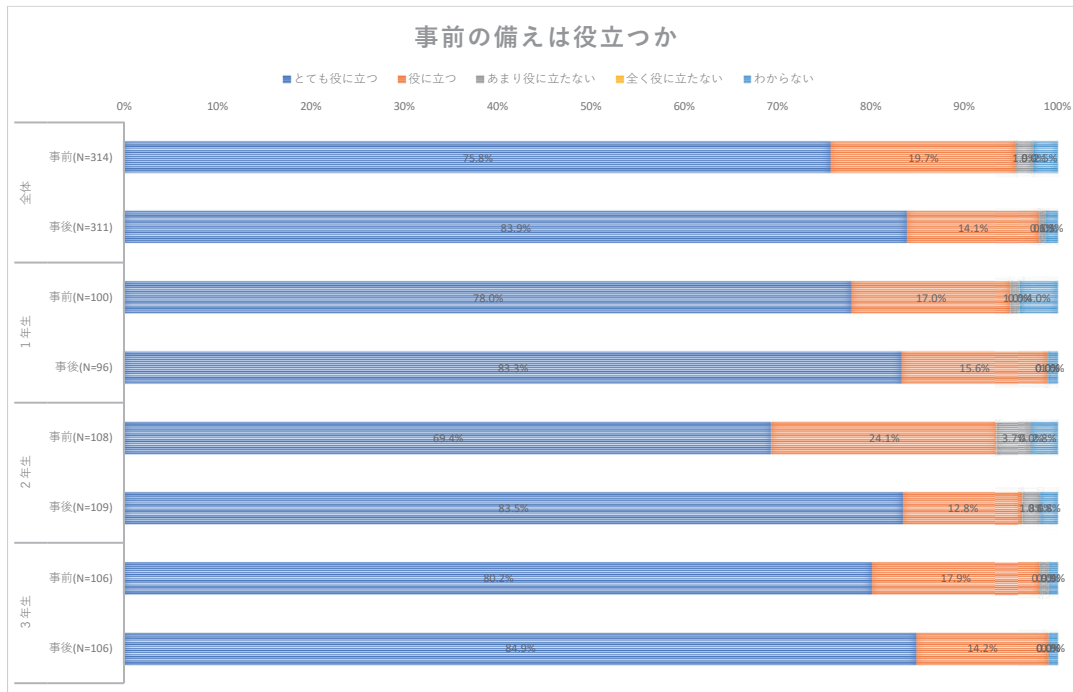


図5：備えの役立ち感

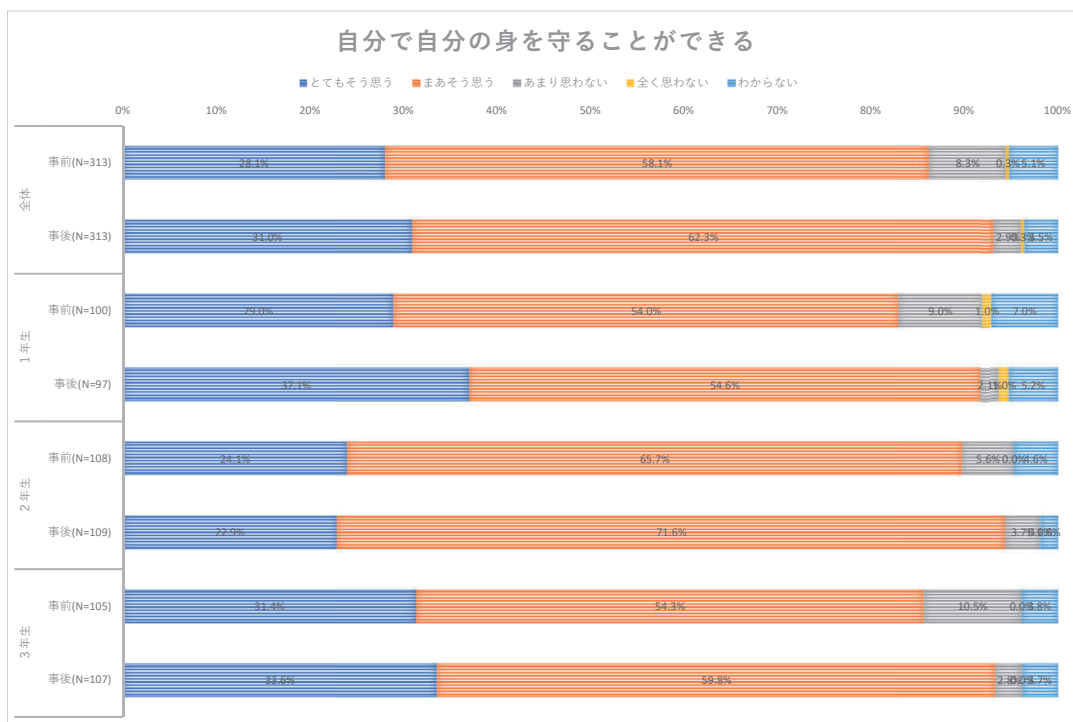


図6：自助の自己効力感

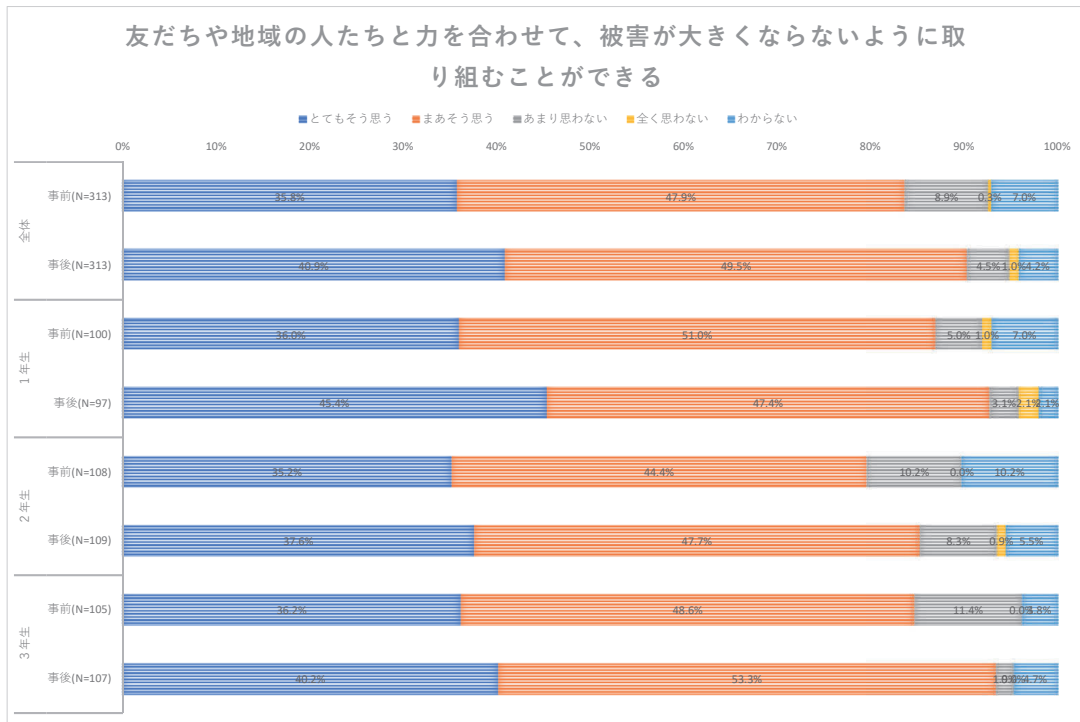


図7：共助の自己効力感

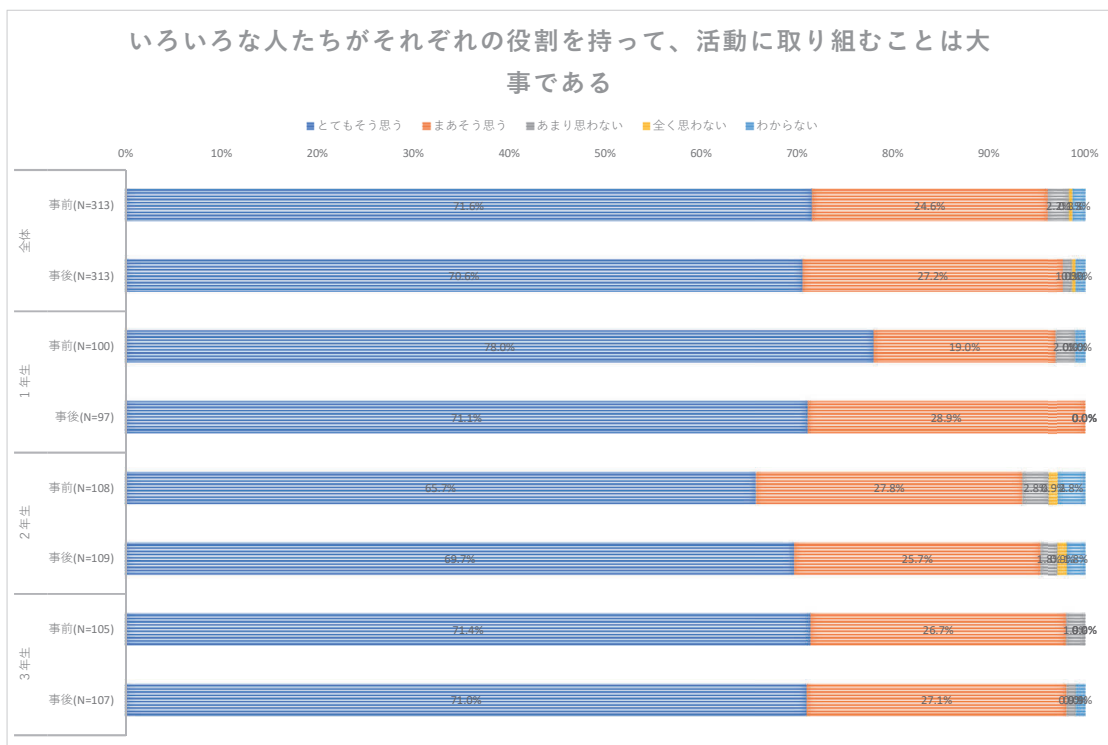


図8：役割認識

(図6)と役割認識(図8)も向上する傾向を示した。感想の例として、以下のようなものが例としてあげられる。

◎1年生

- 簡単に短時間でマスクや皿を作ることができて作り方を覚えることができてよかった
- 近くにあるものを利用して何か役に立つものが作れるか考えることができた

- 今まで知らなかったこともクイズや工作を通して楽しく学ぶことができた

- 今回の防災集会で初めてバッグの例を見せてもらったので防災バッグをすぐ作ってみたいとなった

◎2年生

- 1日の半分以上を過ごしている学校には、防災の観点で見ることが出来ていないところが多くあると気づいた

- あまり危険な場所を探さないから、出来て良かった
- いつもの先生方の授業とは違って楽しかった。危険な場所をたくさん発見することが出来たのでその対策を考えていきたいと思った

◎3年生

- いままでは自分のことしか考えられなかったけど、この集会で障がい者や小さい子ども、外国人が来ることを予想して、その人にあった避難所づくりや行動をどうすれば良いのかを考えることができた
- 今までは、障がい者や小さな子どもをつれた人に対して「手助けをする」という考えでまともでしたが、

実際に災害が起きたときのことを考えると誰がどのように手助けをするかなど、具体的に考える必要が感じました

- 今まで知らなかった知識の知識をみにつけることができてよかったです
- 災害があった時に、自分たち中学生も何か役にたつ仕事があることを知り、積極的に取り組みたいと思いました

授業の全体的な評価も概ね良いものであった。(図9、図10、図11)

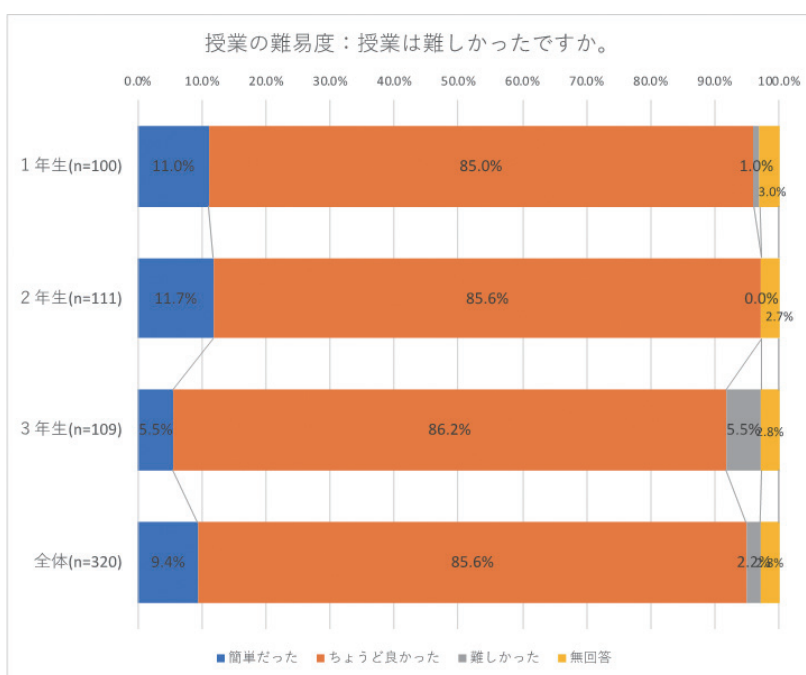


図9：難易度

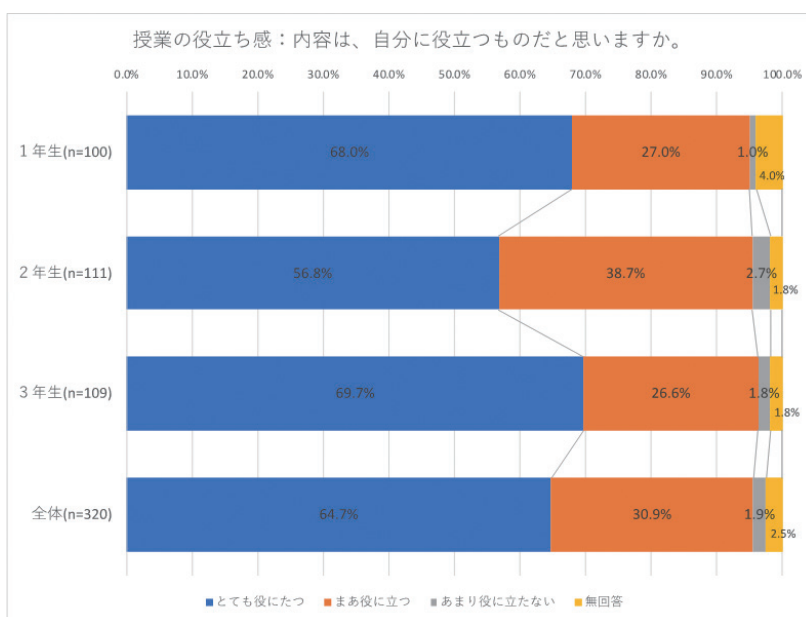


図10：役立ち感

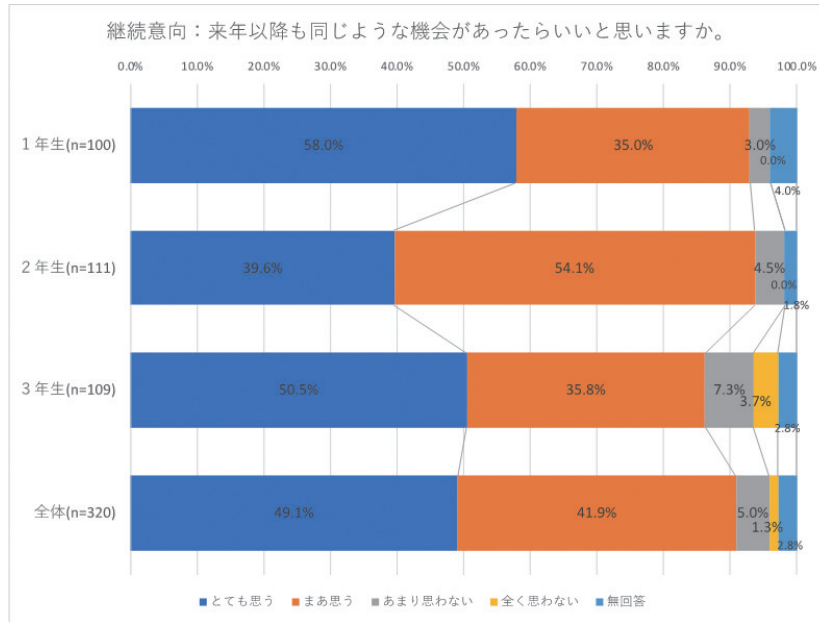


図11：継続意向

3) 西日本豪雨災害被災地復興ボランティア活動への参加と「はままつna Net」との連携

この活動は地域実践演習科目の公式な内容としては含まれないが、2018年度の一部の参加学生が参加し、非常に有意義な経験をしたので紹介したい。

この西日本豪雨災害の被災地支援の活動は、東日本大震災以降、様々な災害の被災地支援に個別に取り組んできた浜松市内の企業同士が効果的な支援のために、「はままつna Net」として組織化される過程で本学との協働体制も構築するなかで実現したものである。

まず、被害の大きかった呉市の支援のために、はままつna Netが2018年9月7日（金）からの週末のボランティアバスを出すことを決定し、学生は大きな割引価格で参加することが可能であったため、数名の学生が参加を申し込んだ。しかし、台風21号の影響で中止となった。その後、バスの運行ではなく、復旧した公共交通機関を利用して個別に参加する機会を得た。11月16日（金）の夜から呉市に入り、週末の2日間ボランティアセンターを介して家屋下の泥のかき出しのボランティア活動に参加した。宿泊は、はままつna Netが長期にわたってボランティア活動への参加を可能にするために借り上げたアパートの一室を借り、そこに滞在した。なお、学生の参加に伴う経済的な負担は一律5,000円であり、新幹線代などの負担を考慮して実行できない可能性のあるボランティア活動への参加が可能になった。一般からの参加についても、15,000円であり、かなりの負担が軽減されている。これらの経済的な負担の軽減は、はままつna Netに賛同する企業が募金箱を設置し、企業社員・職員とその顧客の方々の善意の提供により支えられている。なお、現在ははままつna Netは西日本豪雨災害の被災地の限定をはずし、自然災害の被災地全般と支援の範囲を拡大した。2019年10月の台風19号で甚大な被害を受けた長野県へのボランティア派遣を行っている。

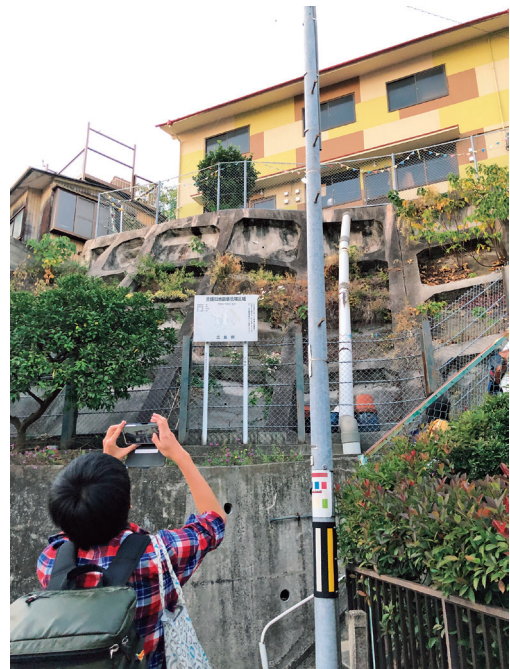


写真4：借り上げられた「ハコアパート」



写真5・6・7：
家屋下の泥のかき出し作業と終了後の片付けの様子

4. 考察

各地で甚大な自然災害が発生し続ける災害大国ともいべきわが国中でも、南海トラフ地震の発生に備える必要のある静岡県では、生活を送るすべての人が高い防災・減災力を備える必要性は特に高い。本稿では、本学学生たちが防災・減災に関して伝える役割を担うことで、自らの防災・減災力の向上を図ることを狙った地域実践演習科目の内容について紹介した。2年間の取り組みで、大きな成果もあったが、出てきたいくつかの課題もある。ここでは、成果と課題を整理する。

1) 成果

まず、防災・減災の分野に特化して、学生たちの学びの機会を増やすことができた点がある。防災教育の準備の段階では、基礎的な知識を身につけることが必須となるため、受動的な講義とはレベル感の違ったものになる。内容を考え、伝えるために自分がしっかりと知り、できるようになっておかなければならない。そして、防災教室を担当する先生役として、児童・生徒たちからの質問に答えることができるように準備しておく必要がある。防災・減災に関心がある学生は多くはないが、皆無ではないことは履修登録の傾向をから読み取れる。2019年度前期に履修したある学生は、ふじの国防災士の資格を取りたいと語っていた。先立って2018年秋に、さいこのリーダーでもある4年生の学生は、防災士の資格を取得した。このような学生の防災・減災に対する関心の種から花を咲かせ、実らせていくことに本科目は貢献していると言えるかもしれない。

一方、防災・減災に関心がなくても、子どもたちへの教育活動という観点から履修する学生もいる。このような学生についても、防災・減災に関する知識や実践的な力を身につけるきっかけとして機能することができれば、同様に有用である。

次に、防災・減災分野における本学の連携関係ができてきたことがある。以前より東小学校との防災活動での連携強化の可能性を探索していたが、科目を通して小学校で大学生たちが防災・減災に関して伝える機会を持ち始めたことは、大きな前進である。実際に災害が発生した際に、協働して活動することが確認できるまでには至っていないが、そこへと繋がる可能性を高めたと言える。さらに、八幡中学校においても同様である。近隣には多くの一人暮らしの本学学生がいるが、八幡中学校の生徒にとって、文芸大の学生が身近なお姉さんやお兄さんの存在になっておくことだけでも、意味があることではないだろうか。

さらに、はままつna Netとの連携は本学学生にとって、ボランティア活動などの防災・減災活動への参加の敷居を低くするというだけでなく、防災・減災に積極的に取り組む善い企業を知るきっかけとなり、地元企業とのつながりを持つことにつながっていく。2018年7月に、はままつna Netは「西日本豪雨災害支援のために手を取り合う」ことを掲げ、限定的に取り組みを開始し、2019年3月に一区切りを迎え、大きな報告会を開催した。この報告会でも学生たちがボランティア活動の経験を発表した。このような機会は学生たちにとって貴重な経験となっている。地域コミュニティにおける防災・減災の分野で本学の学生の活動を含む連携関係ができていくことは大きな成果の一

つと言える。

2) 課題

2年目を終えて、課題も少なくない。一番大きな点は参加する学生が少ないことである。さいのこは非公認サークルであることもその要因であるかもしれないが、加入する学生を毎年獲得することは難しい状況である。

防災・減災は常にそばにあることであるが、考え続けるのは難しいことでもある。実際に自らが被災経験を有する場合を除き、学生たちの関心は総じて低いのが防災・減災であると言っても過言ではない。後期の八幡中学校での取り組み実施には多くの学生の力を要するが、2019年度は履修学生が少なく、そのため個別に呼びかけをして学生たちの協力を募った。サークルへの加入のような継続的参加をする学生の確保もさることながら、学生の中でそれほど深くなくとも基礎的な防災・減災に関する備えを広めていくために、科目として履修する学生を増やすことが肝要となる。

次に、学生の履修とも関連するが、継続性の確保の点がある。小学校や中学校の現場での実感として、教員が考えたものではない、学生の創造による活動が期待されている。つまり、学生の主体的な活動が必要であり、これをリードする学生の養成も重要となる。このようなリーダー的な学生はさいのこのメンバーであることが予想されるが、継続的な加入がない状況下でこの点をどのように打開するかを考えていく必要がある。一方、学生の主体性を生むプロセスによる科目の活動の展開を考えていく必要もある。

5. 今後の展望：まとめに代えて

最後にまとめに代えて、前章で整理した成果と課題をもとに、本学学生の防災・減災力向上に焦点を当てて今後の展望を論じたい。

防災・減災力を大学生が社会を構成する一員として必須のものであり重要であるという前提をとるならば、本科目は一定の成果は出しているが、十分ではない。本科目は単位を出すことで、学生にとっては大事だとわかっているが、優先度の低い防災・減災に関する知識やスキルを身につけることのインセンティブを提供しているわけであるが、このインセンティブをさらに高めていく方策が有用であると考えられる。

例えば、さらに学びを深めたい学生がいるとするならば、ふじの国防災士の資格取得のサポートをするなどの仕組みがあっても良いかもしれない。現在、教職員に対しては、この静岡県独自のふじの国防災士の講座や受講機会について告知されているが、学生たちはその対象ではない。特に、静岡県内の企業は防災・減災への関心も他県と比較して高いであろう。県内企業への就職を希望している学生にとって、防災士の資格取得はアピールポイントになるのではないかと。一方、実際に防災士の資格取得は簡単ではない。そこで、防災・減災活動の学生リーダーとして動ける人材として、SUAC認定「防災・減災学生リーダー」を養成するような枠組みを設けることも、学生にとってのインセンティブになるかもしれない。

地域実践演習科目を履修したり、誘われて防災・減災活動に参加し学生たちは、その経験の良いところを感じとる

ことができる。しかし、まずは経験に一步を踏み出すために、「一見して楽しそうではない」防災・減災に関する活動をより訴求力のあるものにするための工夫も重要である。自らの取り組みが段階的に形になっていくような仕組みの構築は、一つのアプローチとして有用だと考えられる。

静岡県で生活を営む限り、防災・減災力の重要性は語り尽くせないほどである。本学における学生を含めた組織の構成員と近隣のコミュニティ構成員の防災・減災力向上に資する取り組みの展開について、本稿で紹介した地域実践演習科目はスタートして一助を担ったかもしれないが、今後はより体系的に考えていくことを提案して本稿を閉じることとする。

添付資料 1

令和元年浜松市立東小学校防災教育について

1. 今回の目的
 - ①小学校 6年生でもできる防災の取り組みがあるということを知ってもらおう
 - ②保護者様に今回の取り組みを知ってもらい児童と共に家庭内で実践してもらおう
 - ③家庭での防災・減災に関するコミュニケーションの増加を図る

2. 企画内容
 - ①部屋の中に潜む危険を探してみよう(下記画像はプリント配布&モニター投影)



上記の絵本の画像を用いて、部屋内の危険箇所を探してもらおう。
 小学生は班ごとに分かれてもらい、大学生はディスカッションのフォローを行う。
 一通りディスカッションが終わったら、全体で発表の時間を取り、班ごと発表し、
 一通りの意見共有が終わった後に、大学生がまとめをする。
 ⇒実際に各ご家庭でも「大学生からの宿題」として危険な箇所探しをしてもらおう
 ②紙スリッパと紙食器作り体験
 災害時には足を守ることや足裏の体温を逃さないようにすることが大切
 食器なども不足が予想される
 身近にある新聞紙(今回は一部紙で代用)や紙で防災グッズやスリッパの作成方法
 覚えることで、災害時、子ども達にも役割を与えることが出来る。
 今回は大学生がレクチャーしながら、様々なレベルのグッズ作成に挑戦してもらおう

- ③まとめ
 授業のまとめと、保護者向けの資料の配付を行う
3. タイムスケジュール
 - ①大学生自己紹介、今日の概要紹介
 3分
 - ②部屋の中に潜む危険を探してみよう
 17分程度
 - ③作成体験
 23分程度
 - ④まとめ
 2分
4. 大学生側が用意するもの
 - ・「部屋の中に潜む危険を探してみよう」で使用される画像のプリント
 - ・紙スリッパと紙初期の作り方のプリント
 - ・作成体験で使用する紙(新聞紙も用意が出来れば)
 - ・保護者向けへの資料
 - ・帰還中初探しの宿題プリント
 ⇒後日、受け取りに伺い、大学生がフィードバックを記入する予定
5. 学校側にお願いしたいこと
 - ・教室で画像を投影するためのモニターの用意
 - ・班の数と人数を教えてください
 - ・宿題プリントを出すため、その指示

添付資料 2

八幡中学校防災教室 実施後アンケート
 学年 年 組 お名前

八幡中学校防災教室 実施前アンケート
 学年 年 組 お名前

11月14日の防災集会以は、大学生たちが活動を行います。その前に皆さんの防災・減災に関する考え方についておたずねします。正解があるものではないので、自分がどう思うか、考えるか、お答えください。

- 1) あなたは、静岡県を含む東海地方に大きな地震が来ると思いませんか。
 自分の考えが一番近いものをひとつだけ選んで○で囲んでください。
 1. 1~2年以内に起こると思う
 2. 数年以内(3年以上先)に起こると思う
 3. いつかは起こるが、いつかわからない
 4. 起こらないと思う
- 2) あなたやあなたの家族は自分ができる限りの震災に対する備えをしていますか。
 1. はい
 2. いいえ
 2-s) 「はい」と答えた方は、どのような備えをしているか教えてください。(記述式)
- 3) 大きな震災を予想して備えておくことは、役立つと思いますか。
 とても役立つ-----まあ役立つ-----あまり役立たない-----全く役立たない わからない
 3-s) その理由を教えてください。(記述式)
- 4) 大きな地震が発生した時のことを想定して考えてみてください。
 あなたは以下についてどう思いますか。
 自分の考えが一番当てはまるものをひとつだけ選んで○で囲んでください。
 ①自分で自分の身を守ることができる
 とてもそう思う---まあそう思う---あまりそう思わない---全くそう思わない わからない
 ②友だちや地域の人たちと力を合わせて、被害が大きくなるように取り組むことができる
 とてもそう思う---まあそう思う---あまりそう思わない---全くそう思わない わからない
 ③いろいろな人たちがそれぞれの役割を持って、活動に取り組むことは大事である
 とてもそう思う---まあそう思う---あまりそう思わない---全くそう思わない わからない

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。
 11月14日にお会いできるのを楽しみにしています!

- 防災集会の後の皆さんの防災・減災に関する考えや感想を教えてください。
 正解があるものではないので、自分がどう思うか、考えるか、お答えください。
- 1) 防災集会で大学生たちと取り組んだ感想を教えてください。

 - 2) 内容は難しかったですか。ひとつだけ選んで○で囲んでください。
 簡単すぎた-----ちょうどよかった-----難しすぎた
 - 3) 内容は、自分に役立つものだと思いますか。ひとつだけ選んで○で囲んでください。
 とても役立つ---まあ役立つ---あまり役立たない---全く役立たない
 - 4) 来年以降も同じような機会があったらいいなと思いますか。
 とても思う---まあ思う---あまり思わない---全く思わない
 - 5) 防災・減災に関することで、知りたいことがあれば教えてください。

 - 6) あなたは、静岡県を含む東海地方に大きな地震が来ると思いませんか。
 自分の考えが一番近いものをひとつだけ選んで○で囲んでください。
 1. 1~2年以内に起こると思う
 2. 数年以内(3年以上先)に起こると思う
 3. いつかは起こるが、いつかわからない
 4. 起こらないと思う
 - 7) 大きな震災を予想して備えておくことは、役立つと思いますか。
 とても役立つ---まあ役立つ---あまり役立たない---全く役立たない わからない
 7-s) その理由を教えてください。(記述式)
 - 8) 大きな地震が発生した時のことを想定して考えてみてください。あなたは以下についてどう思いますか。
 自分の考えが一番当てはまるものをひとつだけ選んで○で囲んでください。
 ①自分で自分の身を守ることができる
 とてもそう思う---まあそう思う---あまりそう思わない---全くそう思わない わからない
 ②友だちや地域の人たちと力を合わせて、被害が大きくなるように取り組むことができる
 とてもそう思う---まあそう思う---あまりそう思わない---全くそう思わない わからない
 ③いろいろな人たちがそれぞれの役割を持って、活動に取り組むことは大事である
 とてもそう思う---まあそう思う---あまりそう思わない---全くそう思わない わからない
- 質問は以上です。ご協力ありがとうございました!